



ソロプラクティスにおける究極の勉強本

評者 | 古屋 聡 山梨市立牧丘病院

“赤本”と言えば、自分の望む大学を受験する際に、その大学の入試の特徴を伝え、最も強力にその大学への入学を導いてくれる「究極の勉強本」である。では、白石吉彦先生の書いたこの赤本はどうだろうか？

これもまた「究極の勉強本」である。

白石先生は離島に働く内科系総合診療医だ。その総合診療医が、離島でやってくるあらゆる疾患・病態に適応しつつ、独自に編み出した数多くの tips をまとめたのが、青本『離島発 いますぐ使える！ 外来診療 小ワザ 離れワザ』（中山書店、2014）であった。次いで、内科医であるはずの白石先生が、離島のセッティングにおいて否応なく診察せざるをえなくなった「運動器診療」に腰を据えて取り組み、われらプライマリ・ケア医の最も頼りになるパートナー「エコー」を駆使して、プライマリ・ケア医が外来で出合う三大運動器愁訴「腰痛」「肩こり」「五十肩」などについて、圧倒的な説得力で病態解明法と治療法を示していったのが、黄本『離島発 として隠岐の 外来超音波診療—動画でわかる運動器エコー入門』（中山書店、2017）である。この本は運動器診療の革命と言える「Fascia ハイドロリリース」を世間に知らしめ、同様の病態を専門家として取り扱う整形外科専門医にも強いインパクトを与えた。

そして本書、赤本『離島発 として隠岐の エコーで変わる外来診療』では、内科系一般疾患に対し、専門家にすぐ相談できないソロプラクティス現場において、やはり「エコー」を用いて、どのように診断し治療していくかを示した。白石先生の「ソロプラクティスにおける勉強の方法」が鮮やかに示されている。

白石先生は離島において「1人で」、目の前に現れた何らかの病態に対し、エコー機器の使い方に習熟し、エコーでの標的臓器・標的病態の見え方・現れ方をストイックに究明し、国内外の別なく統計にも文献にも当たり、時に歴史的医家の原著も直接参照し、目の前の病態を従来知られている当該病態の知見のなかに布置して診断し、これまた圧倒的な繰り返しと鍛錬のなかで研鑽を積んで洗練された穿刺技術を駆使して治療し、時に患者に最も益になる形で本土の上位病院に送り届けている。さらに、その過程を（エコーで直接見えるので）圧倒的説得力をもって患者・家族と共有し、もちろん、院内の多職種とも共有して連携・協働の糧とし、正確な美しさで動画として記録、そのデータも参照できる成書として、全国各地のプライマリ・ケア現場に届けてくれたのが、この赤本である。

本書は、研修医／ベテラン医師にかかわらず、近年非常に身近になってきたエコーを携えて、目の前の患者にベストを尽くす外来現場の医師のスタートラインである。その「究極の勉強法」を体得していく医師や医学生の視線の先には、日本あるいは海外のへき地離島を含めたあらゆる現場において、仕事もプライベートも研鑽を積みながら楽しんでいける医師の「究極の働き方」も見えてくるだろう。きっと、あなたも隠岐に行きたくなります。

G



離島発 として隠岐の エコーで変わる 外来診療

当てれば見える、
見るとわかる、
わかるから面白い

白石吉彦＝著

定価：本体 6,300 円＋税
B5・224 頁／中山書店／2019
[ISBN978-4-521-74767-5]